

# “Mr. Higginbotham’s Catastrophe”論

——ホーソンと人種問題——

藤吉 清次郎

(高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門)

## “Mr. Higginbotham’s Catastrophe”

——Hawthorne and Race——

Seihiro Fujiyoshi

*Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster  
Humanities and Social Science Unit*

**Abstract:** The purpose of this paper is to examine Hawthorne’s short story “Mr. Higginbotham’s Catastrophe” mainly from the viewpoint of race and social justice, and consider the reason why Hawthorne never published any work openly dealing with racial issues after this short story. Hawthorne points out some facets of social injustice in the American society. The best example is Mr. Higginbotham. He, seemingly a victim, is accused of being a capitalist who ruthlessly exploits his laborers. That is shown by the response of the townspeople who work for him. In this sense, we may not necessarily say that an Irishman and a black man who try to murder the cruel employer are totally to blame, because they can also be considered as his direct or indirect victims from the perspective of race.

In this way, Hawthorne describes social injustice in the society, dealing with racial discrimination against the Irish and blacks in American society of the 19<sup>th</sup> century. When he published this sensational story describing a failed murder by an Irishman and a black man, however, young Hawthorne must have realized that he should not use racial issues as his literary theme. As is seen in “Mr. Higginbotham’s Catastrophe,” Hawthorne was a democrat who had an insight into things and criticized social injustice including racial discrimination. But as we know, he was also a racist who thought that only WASPs were Americans. This incompatible way of thinking made it impossible for this writer to write another “Mr. Higginbotham’s Catastrophe.”

キーワード：ホーソン，人種，奴隸制，社会正義，資本主義

**Keywords:** Hawthorne, Race, Slavery, Social Justice, Capitalism

## はじめに

ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) の短編「ヒギンボタム氏の災難」("Mr. Higginbotham's Catastrophe") は 1834 年 12 月「ニューイングランド・マガジン」(*New-England Magazine*) に発表された作品である。"Young Goodman Brown" (1835), "Rappaccini's Daughter" (1844) などの短編に比べれば、この作品はホーソン文学の特色である「曖昧性」や「象徴性」などの要素を欠いているためか、作品としての評価が低く、議論の対象となることが少なかった。しかし、最近ではテラサ・ゴデュ (Teresa Goddu) やリーランド・パーソン (Leland S. Person) が、人種や階級の観点から作品分析を試み、重要な見解を提出している。

確かに T.ゴデュや L.パーソンの緻密な考察は無名に近いこの作品が再評価するに値するものであることを論証している。しかし残念なことに、彼らの考察では「ヒギンボタム氏の災難」の創作の意義が十分には解明されていないようである。私見では、この作品の創作の意義という点で見逃すことができないのは、1830年代のアメリカ社会においてアイルランド人(アイルランド系移民)と黒人(アフリカ系アメリカ人)が白人たちにとって脅威の存在となっていた時期に、若きホーソンがあえてアイルランド人と黒人を登場人物させ、その二人による殺人未遂事件を描き出していること、そしてこの作品の後、この作家が同時代の深刻な人種問題をリアルに描く「ヒギンボタム氏の災難」のような作品を発表しなかったことである。<sup>1</sup> これらの検証は、「ヒギンボタム氏の災難」に正当な評価を下す上で不可欠であると思われる。そこで本稿では、T.ゴデュや L.パーソンらの先行研究を参照しながら、主に人種的な観点から考察を行い、この短編がホーソンの文学世界、あるいはこの作家の創作人生において、いかなる意味を有するかを論じてみたい。

## I 物語と1830年代の人種問題

まず物語の梗概を確認してみたい。話し好きの煙草の行商人であるドミニカス・パイク (Dominicus Pike) は西コネティカット州のモリスタウン (Morristown) からパーカーズ・フォールズ (Parker's Falls) へ向かう途中で出会ったひとりの旅人から、次のような噂を耳にする。

Old Mr. Higginbotham, of Kimballton, was murdered in his orchard, at eight o'clock last night, by an Irishman and a nigger. They strung him up to the branch of a St. Michael's pear-tree, where nobody would find him till the morning. (107; Italics mine)<sup>2</sup>

この噂を鵜呑みにしたパイクはヒギンボタム氏がアイルランド人と黒人によって殺害されたというニュースを町の酒場でふれまわる。しかし、彼の話は、殺されたはずのヒギンボタム氏と今朝一緒にお酒を飲んだという年配の農夫によって否定されてしまい、意気消沈してしまう。次にパイクはキンボルトンから来たとおぼしき「混血の男」("mulatto"111) と出会い、"Was the old fellow actually murdered, two or three nights ago, by an Irishman and a nigger?" (110) と尋ねるが、彼から "No! No! There was no colored man! It was an Irishman that hanged him last night, at eight o'clock." (111) という返事が返ってくる。混血の男性の言葉に半信半疑のパイクは目的地のパーカーズ・フォールズに着くと、犯行の日時と、犯人がアイルランド人と黒人のふたりなのか、あるいはアイルランド人ひとりだけか用心のために、一応ぼかして事件のことを人々に伝える。

パイクのもたらした情報は町の人々の間にあっという間に広がり、町の新聞である『パーカーズ・フォールズ・ガゼット紙』 ("Parker's Falls Gazette"112) にはその噂をもとにヒギンボタム氏の殺害についての記事が大々的に載せられることになる。語り手によれば、町の人々がヒギンボ

タム氏の事件に強い関心を抱いたのは、氏が町の鉄工所の所有者のひとりであり、綿工場の大口株主でもあり、自分たちの繁栄が氏の運命に関わりがあると感じたからだという。

時の人となったパイクはすっかり舞い上がり、最初の用心などすっかり忘れ、町の水道ポンプによじ登り、住人の前で犯行の日時を含む手持ちの情報を意気揚々と話す。そこに、ヒギンボタム氏は殺害されていないと主張する弁護士が現れ、その証拠としてヒギンボタム氏が昨日の10時に署名した訴訟の書類を見せたのだった。これに加えて、ヒギンボタム氏の姪だという若い美しい女性も、今朝叔父さんと話したという証言をしたことによって、殺害のニュースが完全に間違いであることが判明する。

こうして殺人事件が誤報であることが判明すると、不思議なことに町の住人の怒りはすさまじく、情報源のパイクはリンチされそうになるが、ヒギンボタム氏の姪の弁護によってその難から逃れる。パイクは真偽を確かめるために、例の現場に赴くと、ひとりの屈強なアイルランド人が聖ミカエル梨の木の下でヒギンボタム氏を殺そうとしており、彼は格闘の末、氏を救出する。ヒギンボタム氏の命の恩人となったパイクは氏の姪と結婚し、財産を相続し、煙草工場の主となる。最終的に読者に事件の真相が明かされる。3人の男たち（アイルランド人、黒人、白人）がヒギンボタム氏の殺害・強盗を計画したが、アイルランド人以外のふたりは怖じ気づき、逃げ出してしまい、そのふたりがパイクに事件のことを伝えたのだった。

\*

\*

物語の粗筋を見る限り、「ヒギンボタム氏の災難」はひとりの若者がアイルランド人の暴漢からお金持ちの命を救い、その褒美として彼の姪と結婚し、彼の財産を相続するが許されるという単純な作品であるように思える。しかしこの作品には単純な勧善懲悪の物語として解釈することを阻むようなノイズ的な要素がある。例えば、ヒギンボタム氏の殺害が誤報であることがわかったとき、町の人々がその誤報をもたらしたパイクに怒りをあらわにする場面である。どうやら町の人々が怒った根本的な原因はパイクがデマを流したことではなく、ヒギンボタム氏が亡くなっていなかったという事実にあるようだ。ここには、T.ゴデュが指摘するように、資本家と、搾取される労働者の対立構図が窺える(Goddu133)。この点については、後で分析を加えることにするが、この物語でまず検討しておきたいことは、アイルランド人と黒人がお金持ちの白人資本家を殺害したという噂を基に物語が展開されるということである。パイクの情報は、町中に広まり、何ら取材も検証もなされることもなく「ヒギンボタム氏、無惨にも殺害される」("HORRID MURDER OF MR. HIGGINBOTHAM!"112)という見出しの新聞が発行されたというのである。

このように町の人々がいとも簡単にアイルランド人や黒人ら「非白人」による殺人事件を信じるといふ物語設定を理解するには、作品の書かれた時代背景を念頭に置く必要があるだろう。この点、モニカ・エルバート(Monica Elbert)が指摘しているように、1830年代のニューイングランドにおいてアイルランド人(あるいは彼らの信じるローマ・カトリック教)に対する烈しい反発があり(Elbert61-65)、そしてジェニー・フランショ(Jenny Franchot)が述べているように、「ヒギンボタム氏の災難」が発表される4ヶ月前にはカトリック教とアイルランド人に対する攻撃は最も烈しいものとなっていた(Franchot136)。具体的には若い女性たちがマサチューセッツ州のチャールズタウンのウルスラ会の女子修道院に幽閉されているという噂が流れ、1834年8月11日、60名の長老会派の煉瓦職人からなる暴徒たちがその修道院を焼きはらった(Franchot 136-38)。

物語のなかで語り手はヒギンボタム氏の雇っているアイルランド人について"Mr. Higginbotham had in his service an Irishman of doubtful character, whom he had hired without a recommendation, on the score of economy."(117)と述べているが、これは当時のアイルランド系移民の雇用状況を示唆

している。すなわちアイルランド系移民は、教育も職業訓練も受けていないために、当時のアメリカ白人社会の底辺に位置づけられ、低賃金の肉体労働に従事せざるをえなかったのである。物語の中でアイルランド人の描写に「怪しい」("doubtful"117)、「屈強な」("sturdy"119)のふたつの形容詞が使われているが、これはアメリカ社会での彼らの典型的なイメージであった。この点、ノエル・イグナティエフ(Noel Ignatiev)は"In early years Irish were frequently referred to as 'niggers turned inside out'." (49)と指摘しているが、彼らは黒人と同様に「非白人」の範疇で捉えられていたのである。

一方、黒人(アフリカ系アメリカ人)については、1831年にヴァージニア州サザンプトンにおいて黒人奴隷ナット・ターナー(Nat Turner)が反乱をおこしたが、アン・ファロー(Anne Farrow)らが指摘しているように、この反乱が白人たちに強い不安を与えたであろうことは1831年9月コネティカット州ニューヘブンで若い黒人男子の学校を開校するという法案が700対4という圧倒的多数で否決された事実から窺い知れる(Farrow158)。黒人に教育を受けさせれば、彼らがやがて自分たちにとって危険な存在となると白人たちが判断したからにはほかならない。そもそも北部の白人たちは「ヒギンボタム氏の災難」に出てくるような自由黒人を自分たちと同等の権利を有する人間としては見ておらず、彼らとの共存を嫌っていた。実際北部では1817年にアメリカ植民協会(American Colonization Society)が設立され、22年にアフリカの西海岸に植民地が建設された。この協会は67年までに解放黒人奴隷やその子孫13000名以上をアフリカへ移住させた。その植民地は現在のリベリア(Liberia)である。<sup>3</sup>

以上のように、「ヒギンボタム氏の災難」が発表された1830年代のアメリカ北部社会は人種問題で揺れ動いていたのである。この点、モニカ・エルバートはこの作品が発表された1834年から10年後、週刊の地方新聞『コンコード・フリーマン』(*The Concord Freeman*)に再度載せられた事実に着目し、この作品が当時のアイルランド系移民の状況を反映していることを指摘しているが、前述したようにアイルランド人ばかりでなく黒人を含めた当時の人種状況を視野に入れて作品分析を行うべきだろう。

## II 物語の意義

「ヒギンボタム氏の災難」はアイルランド人・黒人がヒギンボタム氏という裕福な白人の殺害を企てるということを描いた物語であろうか。アイルランド人と黒人はただ人種的脅威を象徴する存在として登場しているのか。一方物語におけるヒギンボタム氏の役割とは何か。まずヒギンボタムの人物造型を分析し、それを踏まえて、アイルランド人と黒人の存在意義を考察する。

前述したように、ヒギンボタム氏は鉄工所の所有者のひとりであり、綿工場の大口の株主である。このことは何を意味するのか。ここで注目したいのはヒギンボタム氏が綿産業に関係する人物である点である。この点、アン・ファローが指摘しているように、南北戦争直前まで、ニューヨーク州、ニューイングランドの多くの州(コネティカット州、マサチューセッツ州、ニューハンプシャー州、メイン州など)の経済は南部で生産される綿と結びついていた(Farrow 4-6)。「ヒギンボタム氏の災難」が発表された時期にあたる、1830年から1840年までの10年間に、北部の綿工場は100万ポンド以上の南部の綿を消費した(Farrow 6)。南部の綿生産は奴隷制に依存していたわけであるから、北部の経済的な繁栄は少なからず奴隷制と不可分の関係にあったと言える。それ故に綿産業の実業家と彼らを支援する北部の政治家たちは奴隷制廃止運動に賛同せず、綿産業の繁栄のために南部の綿花の大農園主たちと妥協点を模索した(Farrow 6, 10-12)。

以上のような考察でわかることは、ヒギンボタム氏は南部の綿花から利益を得る実業家、言い換えれば南部の奴隷制存続に賛同する人物であったのではないかということである。となれば、ホ

ーゾーンがヒギンボタム氏を単に善良な被害者として描いているわけではないことがわかる。前章で「ヒギンボタム氏は金を惜しむあまり、推薦書もない怪しいアイルランド人を雇った」という語り手の証言を取り上げたが、これに加えて語り手は、弁護士がヒギンボタム氏が生きている証拠としてあげた書類の日付と氏の署名について、これは氏が亡くなった後でも訴訟を続ける亡者だという証明になると考える人もいたと述べている(114)。これらはこの人物が悪辣な実業家の顔を持ち合わせていることを示唆している。もちろん、ひどい扱いを受けていたのはアイルランド人や黒人ばかりでないだろう。彼の工場で働く町の白人も同じ目にあっていたと推測される。そのことはヒギンボタム氏のもとで働いていた元従業員が例のニュースを聞いたときの反応とその証言が明らかにしている。

The clerk manifested but little grief at Mr. Higginbotham's catastrophe, hinting, what the pedler had discovered in his own dealings with him, that *he was a crusty old fellow, as close as a vice*. His property would descend to a pretty niece, who was now keeping school in Kimballton.  
(108-109; Italics mine)

この元従業員はヒギンボタム氏の災難を聞いても、ほとんど悲しみを示さず、この経営者が「気むずかしい」老人で、しかも「悪徳」と言っていよいよの「けち」であることを仄めかす。この男性が関心を示しているのはこの老人がなくなった後、貯め込んだ財産がだれのものになるかということだけである。

これほどの嫌われ者の経営者であるから、彼が殺されたというニュースが誤りであるということを知ったときの町の人々の心理状態も理解できるだろう。語り手はそのときの住人の様子のように述べている。

[A] stranger would have supposed that Mr. Higginbotham was an object of abhorrence at Parker's Falls, and that a thanks-giving had been proclaimed for his murder; so excessive was the wrath of the inhabitants, on learning their mistake. (115)

ここで経営者の死を知って感謝の祈りを捧げたいような気分の町の住人たちはニュースの誤りに烈しい怒りを覚えている。経営者がこれほどまでに住民に嫌悪されるような人物として描かれていることは重要であろう。彼はアイルランド人の雇用者採用の仕方でわかるように、安い労働力がほしいだけなのだ。要するにヒギンボタム氏は間接的にあれ、奴隷制に関与し、あこぎに金儲けをする資本家として描かれているのである。

\*

\*

以上のように、ヒギンボタム氏が強欲な白人経営者であるならば、アイルランド人や黒人の捉え方も当然変わってくるだろう。ヒギンボタム氏を襲うアイルランド人が氏の雇ったアイルランド人と同一人物かどうかはわからないが、もし L.パーソンが示唆しているように、同一人物であれば彼があのような凶行に出たことも十分理解できる(Person①15)。というのも白人労働者が経営者ヒギンボタムの死を喜ぶという物語設定を考慮に入れば、彼らより劣悪な労働条件で働かざるを得ないアイルランド人の不満も相当なものであったと推察されるからである。もちろんこのアイルランド人が氏の労働者でなくとも、彼の置かれた社会状況は大変厳しいものであったであろう。こうした観点からみれば、アイルランド人(もちろん黒人も含めて)は社会の弱者であり、資本家ヒギンボタム氏は彼らを食べ物にする悪者である。この意味で「ヒギンボタム氏の災難」と

いう物語のタイトルに大変な皮肉が込められていることがわかる。ヒギンボタムにとって事件は「災難」などではなく、当然の報いなのだ。

だが、ホーソーンの批判の目は単にヒギンボタム氏だけに向けられているだけではない。この点、先に述べたように、1830年代のアイランド人と黒人に対する人種偏見を無視するわけにはいかない。当時のアメリカ社会においては、アイランド人や黒人は残虐な犯罪をおこしかねない野蛮な存在であるという人種偏見が蔓延していたのである。しかし物語において野蛮な存在として描かれているのはむしろ、白人の住民のほうである。語り手が住民を、否定的な意味を持つ「群衆」("mob"113)と呼んでいることからわかるように、彼らはヒギンボタム氏が殺されたというニュースを聞き、歎びで興奮し、<sup>4</sup>そしてその殺害が誤報であるとわかったとき、彼らはバイクをリンチにかけようとし、実際氏の姪の巧みな説得がなければ、リンチが起きた可能性は高い。こうした描写は彼らが民主主義の精神を欠落させていることを暗示するものだろう。

そういえば、このような民主主義に反するような不正義の告発は、1830年代に発表されたホーソーンの多くの短編小説に共通するモチーフである。例えば、"The Gentle Boy"(1832)、"The May-Pole of Merry Mount"(1836)において、ピューリタンたちの犯した罪を鋭くえぐり出し、"Roger Malvin's Burial"(1832)においては、ピューリタンたちが行ったインディアン征伐を正当化し、それを神話化しようとする同時代(1830年代)の帝国の道を邁進するアメリカ社会に対して、その神話の虚実を暴いて見せている。<sup>5</sup>これらの作品と同様に、「ヒギンボタム氏の災難」はヒギンボタム氏の悪行を密かに告発しつつ、それと同時に人種的偏見に基づいて、新聞記事がでっちあげられるプロセスと住民の野蛮な反応を提示することによって、同時代のアメリカ民主主義社会に存在する不正義を告発する物語であると言える。

### III 作品の結末と創作の意図

次に、物語の結末を簡単に考察しておこう。語り手によれば、バイクはヒギンボタム氏の命を救ったことにより彼の姪と結婚し、財産を引き継ぎ、煙草工場を建てたというが、われわれ読者はこの結末をどのように捉えればよいのであろうか。例えば、T.ゴデュは"[T]he romance ending of the story projects a fantasy of upward mobility rather than the gothic horror of class instability."と述べ、煙草の行商人が大きな煙草工場の経営者になってしまう物語結末が労働者階級の人々に希望を与えるものとなっていると指摘しているが(Goddu135)、バイクが煙草工場の経営者に収まることは何を意味するのか。

ジェームズ・オゴーマン (James F. O'Gorman) が考察しているように、コネティケット州では1830年代から大きな煙草工場が現れはじめるが、煙草はこの地域で大きな産業となった。注目すべきは、煙草産業が低賃金の移民の労働力に依存していたという点である(O'Gorman 29, 36)。この点、T.ゴデュは"Ethan Brand"(1850)の分析において、"Tobacco, one of slavery's commodities, simultaneously exposes the fiendishness of industrial capitalism that steals workers' souls and denigrates those workers as unworthy of anything else." (Goddu139)と指摘しているが、このことは「ヒギンボタム氏の災難」にも適用できるであろう。1830年代の北部では煙草産業は奴隷制によって維持されていたわけではないが、しかし奴隷制による生産品のひとつである煙草は、労働者を軽んじ、彼らの魂を蹂躪する産業資本主義の悪魔性を象徴している。まさしく煙草工場経営者になったバイクは結果的にヒギンボタム氏と同様の立場に立っており、批判の対象となっているのである。

以上のような結末を人種的な観点から言えば、アイランド人や黒人は人種的他者であるが故にアメリカ社会では成功の可能性はないが、バイクのような白人は労働者階級であろうとも、白人であるが故に経営者、資本家になる可能性があるということである。さらに言えば、物語の途

中で姿を消す黒人は L.パーソンが指摘しているように、その存在さえ白いアメリカ社会には必要ないということを暗示するメッセージとも解釈できよう (Person①13)。このような物語設定はホーソンが当時の白人読者の嗜好や社会状況を十分に意識したものだと考えられるが、しかしこれまで考察してきたように、ホーソンの密かな批判の目はパイクの成功を無邪気に受け入れる白人読者や非民主的社會に向けられているのである。

\*

\*

最後に、「ヒギンボタム氏の災難」がホーソンの文学世界で有する意味を考察しておこう。ホーソンの作家人生は大まかに言えば、1830年代40年代の短編時代と50年代の長編時代に分けられる。「ヒギンボタム氏の災難」が発表された30年代の短編時代、若きホーソンは主要な文学的題材をニューイングランドの歴史に見出し、“My Kinsman, Major Molineux”(1832)、“Roger Malvin's Burial”(1832)、“Young Goodman Brown”(1835)などの代表作を生み出している。この作家がこうした歴史に文学的題材を求めたのはおそらく二つの理由によるものだろう。ひとつは歴史であれば、現実世界に縛られることなく、自由に(心の)真実を描き出すことが可能であると判断したということ。もうひとつはホーソンが同じ時代に活躍していた大衆作家とは異なり、読者の嗜好に重きを置き、彼らの情動に訴えかけるような感傷的な描き方、あるいはエンターテインメント性豊かな描き方を好まなかったということである。

しかし、ホーソンは「ヒギンボタム氏の災難」において過去の世界ではなく同時代の世界を舞台に人種問題の絡む殺人未遂事件を扇情的かつ推理小説的に描いた。<sup>6</sup> ニナ・ベイム(Nina Baym)も指摘しているように、この創作の背景には、若きホーソンが1830年代売れる作品を発表することによって社会的に認知されたいという強い願望を抱いていたことがあるだろう(Baym 50)。この作家もまた扇情的な内容を好む読者を無視できなかったということであろう。この作品が1844年に新聞に再び載せられた事実から判断して、ホーソンのねらいは見事に的中したと思われる。しかしこの作品の創作を通じて若きホーソンは貴重な教訓を学んだのかもしれない。それは同時代の人種問題をあからさまに——言質を取られるという意味において——作品のテーマとして扱わないということである。というのも「ヒギンボタム氏の災難」以降、この作家は同時代の人種問題(黒人奴隷制問題、アイルランド系移民問題)を押し出して描くことを避けるように思えるからである。ホーソンにとって同時代の人種問題はそれほどデリケートなものだったと考えられるのである。

「ヒギンボタム氏の災難」の考察で明らかにしたように、ホーソンは同時代の人々の人種偏見や社会の奴隷制的搾取を見抜き、それらを鋭く批判する民主主義者であった。しかし、その一方で彼はバーナード・ローゼンタール(Bernard Rosenthal)らも指摘しているように、WASP(White Anglo-Saxon Protestant)をもってアメリカ人とする人種差別的な見解の持ち主であり(Rosenthal2, 6,7)、同時代作家であるエマソン(Ralph Waldo Emerson)やソロー(Henry David Thoreau)などとは異なり、奴隷制廃止運動に距離を置き、公には人種的な発言を避け続けた作家でもあったのである。<sup>7</sup> このような相矛盾する思考はホーソンに同時代の人種問題をテーマとする作品を発表することを困難にしたと思われる。その意味において、当時の人種差別の問題を前面に押し出して推理小説的に描いた「ヒギンボタム氏の災難」は若きホーソンがその若さ故に危険な領域に踏み込んだ唯一の作品として評価されるべきだろう。

## 注

1. ホーソンの生きた時代は奴隷制問題、インディアン問題、アイルランド系移民問題などの人種問題が政治的にも文化的にも社会を揺るがしていたが、ホーソンはひとつの例外的な発言

— 1852年に大学時代の同級生のフランクリン・ピアス (Franklin Pierce) のために作成した大統領選挙用パンフレットでの奴隷制擁護の発言—を除いて、公的には人種問題に関して沈黙を守った。しかしながら、ホーソーンの文学世界を見れば、この作家が多くの登場人物の造型において人種の要素に大きく依存していることは明らかであろう。彼は特にインディアン表象を好んで利用している。例えば、彼の最高傑作 *The Scarlet Letter*(1850)のヘスター・プリン (Hester Prynne)やチリングワース (Chillingworth)では野性性、生命力、無秩序などを連想させるインディアン表象によって、それぞれの「荒野としての内面」が見事に描かれている。このようにホーソーンがインディアン表象を利用した要因として、ニューイングランドの歴史を描く上でインディアンの存在が不可欠であったこと、またインディアン問題を同時代の深刻な人種問題として必ずしも認識していなかったと思われるこの作家にとって活用しやすかったことなどが考えられる。本稿ではホーソーンが「ヒギンボタム氏の災難」以降、民主主義の精神に則って人種差別を告発するためではなく、白人たちの内面世界を豊かに語るためのメタファーとして黒人やインディアン表象を利用するようになったという立場にとりたい。

2. ホーソーン作品に関しては, "Mr. Higginbotham's Catastrophe." *Twice-Told Tales*. Vol. 9 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. 23 vols. (Columbus: Ohio State UP, 1974) を使用した。頁数は引用文に続けて括弧に入れて示す。
3. アメリカ植民協会については, "The African-American Mosaic - A Library of Congress Resource Guide for the Study of Black History & Culture" と, 荒このみ「ふたたび建設される植民地—アメリカ植民協会年報と『アングル・トムの小屋』」を参照した。
4. ゴデューは, "Structurally, the Irishman and other blackened representatives of the working class enact the class resentment of the oppressed white shopkeepers, mill men, and factory girls." (Goddu 133-34) と述べ, アイルランド人たちが労働者階級を代表して町の人々の鬱積した怒りを実行していると指摘している。
5. 拙論「インディアン問題とアメリカ神話—「Roger Malvin's Burial」論」においてアメリカ先住民とアメリカ帝国主義の問題を論じた。
6. ボルヘス (Borges) は " 'Mr. Higginbotham's Catastrophe' prefigures the detective story that Poe was to invent." (Borges 63) と述べているが, しかし「ヒギンボタム氏の災難」は推理小説にはなっていない。竹村和子はその三つの理由を挙げている。①「殺人とか盗難とかいった悲劇はなく, むしろ阻止されている」こと。②「この作品が謎解きを主眼としたものではなく, 謎らしきものが作品の進行とともに漠然と現れ, 成り行き上, 結果的に解かれてしまった」こと。③「この作品の結末においては, 抑圧され, 隠蔽されていたものが全て開陳されたわけではない」こと。竹村は特に③が「この作品を推理小説のジャンルからはみ出させている最も大きい要因ではないか」と述べている (竹村 86)。
7. リーランド・パーソンが指摘しているように, 黒人奴隷制を強化する悪法「逃亡奴隷法」が 1850年に可決されたとき, ホーソーンが怒りを示さず, 沈黙を守ったことは同時代の奴隷制廃止主義者たちを大いに怒らせたのだった (Person 26)。

### Works Cited

- "The African-American Mosaic - A Library of Congress Resource Guide for the Study of Black History & Culture." <http://www.loc.gov/exhibits/african/afam002.html>
- Baym, Nina. *The Shape of Hawthorne's Career*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1976.

- Borges, Jorge Luis. “Nathaniel Hawthorne.” In *Other Inquisitions 1937-1952*.  
 Trans. Ruth L.C. Simms. Austin: Univ. of Texas Press, 1964, pp.47-65.
- Elbert, Monica. “Nathaniel Hawthorne, *The Concord Freeman*, and the Irish 'Other.'”  
*Eire-Ireland* 29.3(1994): 60-73.
- Farrow, Anne, Joel Land, Jenifer Frank, and Cheryl Magazine. *Complicity: How the North  
 Promoted, Prolonged, and Profited from Slavery*. New York: Ballantine, 2005.
- Franchot, Jenny. *Roads to Rome: The Antebellum Protestant Encounter with Catholicism*.  
 Berkeley: U of California P, 1994.
- Goddu, Teresa. “Hawthorne and Class.” *What Democracy Looks Like: A New Critical  
 Realism for a Post-Seattle World*. Ed. Amy Schrager Lnad and Cecelia Tichi. New  
 Brunswick: Rutgers UP, 2006. 131-143.
- Hawthorne, Nathaniel. “Mr. Higginbotham's Catastrophe.” *Twice-Told Tales*. Vol. 9 of  
*The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. 23  
 vols. Columbus: Ohio State UP, 1974.
- Ignatiev, Noel. *How the Irish Became White*. New York: Routledge, 1995.
- O' Gorman, James F. *Connecticut Valley Vernacular: The Vanishing Landscape and  
 Architecture of the New England Tobacco Fields*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2002.
- Person, Leland S. ① “‘Mr. Higginbotham's Catastrophe’: Race and Class Conflict in New  
 England.” *Nathaniel Hawthorne Review* 38.1 (Spring 2012): 1-18.  
 \_\_\_\_\_ . ② *The Cambridge Introduction to Nathaniel Hawthorne*. New York: Cambridge  
 UP, 2007.
- 荒このみ 「ふたたび建設される植民地—アメリカ植民協会年報と『アンクル・トムの小屋』」  
 『史料で読むアメリカ文化史2』荒このみ(編)東京大学出版会, 2005年. 274-286.
- 竹村和子 「言説と隠蔽: 「ヒギンボタム氏の災難」考: ホーソンにおける時間の相その一」  
 『アメリカ文学評論』第9号 1988年. 79-89.
- 藤吉清次郎 「インディアン問題とアメリカ神話—“Roger Malvin's Burial”論」『アメリカ・  
 エスニック文学』 第3号 2007年. 62-71.

平成26年(2014)10月9日受理

平成26年(2014)12月31日発行